

中国の国際バカロレア導入校における 進学指導システムについて

A Study on College Guidance Counseling in the International Baccalaureate's School of China

黄 丹青
Tansei KO

Keywords : International Baccalaureate, college Guidance Counseling, public high school

キーワード : 国際バカロレア、進学指導、公立高校

中国の国際バカロレア (IB) 導入校が2014年12月現在82校¹⁾に達した。最初に導入されたのは北京にあるインターナショナルスクールであり、1991年のことであったが、その間現地私立校、さらに公立校へと徐々に広がり、進学先の一つとして社会に認知されるようになった。無論、それが中国国内の研究者にも注目され、論文が発表されてきた。ただし、それらの論文がIBの概況や、そのカリキュラムと教育方法を対象にしたものがほとんどであり、実施の結果としての進学に関する研究が皆無に近い²⁾。筆者は中国でのIB導入校が拡大してきた背景や経緯及びその特徴を取り上げた³⁾が、本稿は主に現地公立校を対象に、IBDP (ディプロマ プログラム) の卒業生の進路先を分析 (第一節) したうえ、それを実現するためにどのような進路指導体制を整い、そして構成される教員の出身国、学歴などを整理する (第二節) ことによって、進路から中国の公立IB導入校拡大の一因を究明しようとする。

一. 公立導入校の卒業生の進路先

1. 公立導入校の拡大

中国のIB導入校が2014年12月現在82校であるが、その内訳は表1-1の通りである。公立の導入校数は17校、私立校とほぼ同数になるが、幼稚園と小学校にあたるPYP (初等課程プログラム) がゼロであるのに対して、15校が高校最後の2年にあたるDPコースを設置する。つまり、インターナショナルスクールや私立校によく見られる一貫校よりも、中学校の卒業生を受け入れ大学に送り出す高校段階がメインとなっており、大学進路への準備過程としての高校の性格がより明確であると考えられる。

公立校で最初にIBが導入されたのは1996年のことであり、北京55中学によるものであった。その後急激に増加してきたのは国の総合的な教育政策を規定する「国家中長期教育改革と発展に関する計画綱要（2010－2020）」（以下「中長期計画綱要」と略称）が公布されてからのことであり、つまり2010以降になる。「中長期計画綱要」の中で、「国際交流と国際協力の強化」（第48節）、「優良な教育資源の導入」（第49節）、「国際協力・国際交流の質的向上」（第50節）」の三点が言及され、「国の経済社会における対外開放というニーズに応じ、国際的視野を有し、国際ルールに通じ、国際的実務と国際競争に参加できる国際的人材を数多く養成する」という目標を明確に打ち出した。IB関連で特に注目されるのは、第49節の「国外の知名な学校、教育と研究機関及び企業を取り入れ、教学・実地訓練・研究の機構あるいはプロジェクトを合同で設立する。各段階各種類の学校における多様な国際交流と協力を奨励し、若干の中外合同設置校及びプロジェクトを良いモデルとして運営し、多様な方法で国外の良質な教育資源の利用を探求する」という提起である。ただし、中学校までの義務教育段階においては、外国の教育プログラムの導入が不可能に近いため、高校段階のDPが大多数を占めるようになる。

表1-1 学校タイプ別コース別導入数

	国際学校	現地私立	現地公立
学校数	47	18	17
PYP	24	8	0
MYP	14	5	4
DP	37	13	15
CC	2	0	0
合計	77	26	19

出所：注1を参照

MYP：中等課程プログラム

CC：キャリアプログラム

では、DPの卒業生はどのような進路先を選ぶのか、次に見てみよう。

2. 卒業生の進路先とその特徴

IBDP公立導入校15校のうち、ホームページで進学情報が公開されているのは11校である。その形式は学校により異なり、大きく2つに分けることができる。一つは卒業生全体についてのどのぐらい合格通知書が届いたのか。もう一つは個々の卒業生にどこから合格通知書が届いたのか。ただし、公開の年度が時系列ではなく、その中の一年だけとか、あるいはA-レベル⁴⁾やAPプログラム⁵⁾などほかの外国教育プログラムと区別せず発表するとか、IB卒業生だけの系統的なデータの入手が困難である。ここではいくつかの例を取り上げ、そこから進学先に関する特徴を見ることとしよう。

まずは2013年に最初のIBDP卒業生から連続3年のデータを公開するA校（上海）を見てみよう。A校は2011年5月にIB校となり、DP課程を展開すると同時に、外国人子弟や外国からの華僑子弟に中国語の教育を行い、中国の有名校への進学準備教育にも大きな実績をあげてきた。

さて、DP卒業生の進学先実績は表1-2の通りである。

表1-2 A校卒業生の大学合格書数とその国別数

年度	統計日	卒業生数	合格書	米国	英国	カナダ	豪州	欧州他	香港
2013	5.50	18	53/95	37/72	3/3	11/18	2/2	0	0
2014	4.22	39	88/162	51/77	12/14	15/60	7/7	3/4	0
2015	4.20	42	112/203	74/135	20/28	11/32	3/3	3/4	1/1

出所：(1)<http://www.weiyu.sh.cn/cms/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=98&id=3598>

(2013年度、2015年5月10日)

(2)<http://www.weiyu.sh.cn/cms/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=98&id=5169>

(2014年度、2015年5月10日)

(3)<http://www.weiyu.sh.cn/cms/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=98&id=6343>

(2015年度、2015年5月10日)

合格書と国別欄にある数字に関しては、左は学校数、右は証書数

データを見ると、まず卒業生数は1期生に比べると2期生が倍以上も増えたが、3期生は2期生より微増に止まった。それに従い合格書数も増加するが、一人あたりで2013年から順に5.3、4.2、4.8通となっており、2014年は前年より約1通下がったが、3年目の2015年になると、初年度には及ばないものの、持ち直している。また国別でみると、アメリカからの合格書数が最も多く、年度順で全体の75.8%、47.5%、66.5%を占め、その次はカナダで全体を占める割合が年度順で18.9%、37.0%、15.8%となる。3位はイギリスであるが、低下するアメリカとカナダに対して、合格書数の占める割合が年度順で3.2%、8.6%、20.7%となっており、大幅な上昇をたどってきた。

次は、イギリスを例にA校の卒業生がどのような大学に進学することになるかを見てみよう。

それは入学合格書数が増加傾向にあるとともに、イギリスの場合、入学選抜におけるDPの成績の位置づけがきわめて明確であるからである。SATという共通試験の成績等に加えIBの履修をプラス材料として推奨する大学が多いアメリカと異なり、イギリスではIBDPの成績を大学入試機構（UCAS）⁶⁾が独自のTariff pointに換算し、大学ごとに出願に必要なIBスコアも作成する。ゆえに、IBの得点がイギリスの大学入学とよりストレートな関係を持つと考えられる。表1-3を見ると、合格大学が2013年の3校から2015年の20校へと拡大するにつれ、進学先も古い歴史をもつ有名校から、地方にあるより新しい大学へと広がってきた。つまり、IBDPの募集者数が増えるに従い、より幅広い生徒が入学するようになったのである。

表 1 - 3 年度別英国の大学から A 校への合格書数

大学名	2013年	2014年	2015年
Cardiff University			2
Durham University	1	2	2
Goldsmiths, University of London			1
Imperial College London	1		1
Keele University		1	1
Lancaster University			3
Newcastle University			2
Royal Holloway, University of London		1	1
The University of St Andrews			1
University College London		1	3
University of Bath	1		1
University of Birmingham			1
University of Central Lancashire			1
University of Edinburgh		2	2
University of Exeter			1
University of Hull		1	
University of Kent		1	
University of Leeds		1	
University of Leicester			1
University of Manchester		1	1
University of Strathclyde			1
University of Southampton		1	
University of Surrey		1	1
University of Westminster			1
University of Warwick		1	
合計	3	14	28

出所：同表 1 - 2

次に卒業生ごとに入学合格書の情報が公開される B 校（江蘇省）の 2015 年の状況を見てみよう。B 校は 2009 年から IB 認定校となり、中国の公立校では比較的早い時期での導入となる。2015 年 1 月 5 日の情報⁷⁾によると、49 人の卒業予定者に届いた大学入学合格書は 185 通であるが、平均して 1 人につき 3.8 通である。その中で最高の 8 校と最低の 1 校は同じく 4 人であるが、最も多いのは 3 校の 12 人であり、次は 2 校の 11 人という状況である。国別を見ると、最も多い 125 通の米国に続き、2 位はカナダの 45 通である。3 位のイギリスの 12 通のほかに、豪、独及び香港がそれぞれ 1 通となる。

表1-4 8通の合格書を有するB校生徒4人の合格大学名

大学名	Jさん	Dさん	Sさん	Lさん	合計
Binghamton University-SUNY, USA	1		1		2
Carleton College, USA				1	1
Dickinson College, USA		1			1
Hamilton College, USA				1	1
Indiana University Bloomington, USA	1	1			2
Michigan State University, USA		1			1
Mount Holyoke College, USA				1	1
New York University, USA				1	1
The Pennsylvania State University, USA	1	1	1		3
Purdue University, USA	1				1
Smith College, USA				1	1
Tulane University, USA			1		1
University of California, Berkeley, USA				1	1
University of California, Davis, USA		1			1
University of California, Irvine, USA		1			1
University of California, Los Angeles, USA				1	1
University of Florida, USA	1				1
University of Iowa, USA		1			1
University of Minnesota-Twin Cities, USA			1		1
University of Washington-Seattle, USA		1			1
McGill University, Canada			1		1
Queen's University, Canada			1		1
University of British Columbia, Canada	1				1
University of Toronto, Canada	1		1		2
University of Waterloo, Canada			1		1
Western University, Canada	1				1
The University of Hong Kong				1	1

出所：http://58.213.145.148/Press/ViewDetails.aspx?id=5618（2015年5月11日）

表1-4は3年の生徒4人に届いた大学合格通知書の大学リストである。その中で最も多いのはアメリカの20校であるが、続くカナダは6校にのぼり、1校は香港である。

ここでは、データの性格とスペースの制限で2校の例しかあげていないが、他の導入校の数字を合わせてみても、米英とカナダの大学が大多数を占め、ヨーロッパ大陸が少数で、アジアに至っては、香港・日本・シンガポールからのものが僅少で、本国中国大陸の大学は1校もない。つまり、中国の公立IBDP導入校においては、その卒業生の進学先として基本的に欧米の大学を選ぶ傾向にある。無論学習する内容の多くは英語によるものであるが、それだけではスムーズに進学するのは決して容易ではない。次に欧米大学への進学を如何に可能にしたのかを進学指導から見よう。

二. 進学指導システムと教員

1. 進学指導担当

わずかな推薦枠を除き、一回のペーパーテストで進学先が決まるという中国式入試システムではなく、平時のテストの成績や学校評価による選抜に対応することは、中国の学校にとって容易なことではない。まず、それぞれの大学の要望が異なり、また学生の志望や個性にも応じないといけなないので、多様できめ細やかな進学指導が必要になる。そのため、IBDP導入校では進路指導センターが設置され、専門スタッフがおかれるようになった。たとえば、C校（浙江）では、3学年188名のDP生徒に6名の進路カウンセラーが対応し、その中の2名は2015年9月から採用されるアメリカ人のスタッフである。彼女らは情報の収集や、外国からの入試スタッフの対応、なによりも応募する時のポイントなど、中国の進学にない方法の指導が期待される。

卒業生の進学先探しは、最初は関連大学の欧米姉妹校や、学校間の相互訪問により知り合った外国の大学との交流や提携から始まった。しかし、その定員枠に限られるので、大学へのネットによる直接応募も無論あるが、欧米の大学の入学説明会中国ツアーに申し込み、大学の入試スタッフに直接に学校に来てもらう形がかなり一般的になった。つぎは具体的に学校の例で見てみよう。

2. 欧米の大学の入試説明会

近年、欧米の大学が頻繁に中国ツアーを組んで、入試説明会を開催する。それは教育エージェントによるものもあるが、中国の学校側が自ら連絡を取り、招待する時もある。次のデータはD校（吉林）のものである。

D校は2006年から、アメリカの大学と提携を結び始め、2008年から海外の大学を訪問するようになる。相互の訪問から提携関係を増やしていくことは、卒業生の進学にとって大事なことである。以下は2008年度からの5年にわたり進学説明会を開いた国別の大学数である。

表2-1 留学説明会を開催した国別大学数

	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
アメリカ	1	9	5	5	11
イギリス	0	8	1	0	0
カナダ	0	0	0	0	3
日本	0	2	2	3	1
韓国	0	0	0	0	2
香港	0	2	1	1	0
合計	1	21	9	9	17

出所：<http://www.msannu.cn/48/list.htm>

中国での学年度は9月から翌年の6月まで。ここでは夏休みの8月まで一学年とする。

表2-1をみると、進学先として一番多くの留学生が選ぶアメリカの大学数がどの年度も最も多く、しかも2009年を除き2位の国との差がかなり大きい。次に多いのはイギリスかカナダであるが、それは今まで見た他校の傾向と一致する。来訪校数と合格通知書数との落差が見られるのは日本の大学である。2009年から2011年の間に、日本の大学が複数回で説明会に参加したが、実際に進学先として日本の大学を選ぶのは年によって1人程度であり、香港より少ない。

しかし、全体的にみると、卒業予定者とその保護者にとって、入試説明会で大学のスタッフと直に会い、大学の特徴や入学条件等に関して話し合うことにメリットが大きく、選択肢を広げる上で極めて重要である。それとともに、欧米の大学に通じる能力、なかでも英語による能力の養成が大きく問われる。次はそれに不可欠な教員の条件に焦点を合わせることにする。

3. IBDP導入校の教員構成

教員の記載のない1校を除き、外国籍教員がすべての公立IBDP導入校に採用されている。ただ教員全体に占める割合は、国内教員が大多数の学校から、中国語以外の授業がほぼ外国籍教員の担当という学校まで様々である。ここでE校を例に見てみると⁸⁾、21人の教員が中国籍6人、イギリス8人、カナダ4人、アメリカ1人、ニュージーランド1人、インド1人から構成されるが、ニュージーランド籍の数学担当者は中国出身で中国の大学を卒業したのち90年代に留学のため出国した教員である。また、中国籍教員6人については、5人が中国語を担当し、残り1人が専門科目を担当する数学教員である。

教員の教職歴に関しては、中国籍教員は1年～6年の間であるが、外国籍教員は4年～18年の間で多くの国で経験を積んできたケースが多い。それを5年区切りで見ると、5年以下1人、6年～10年7人、11年～15年6人、16年～1人という状況である。

また、出身校と学歴をみると、中国籍教員は復旦大学2人、華東師範大学3人に、広西大学1人から構成され、全員修士号の取得者である。外国籍教員の出身校及び担当科目リストは以下の通りであり、その中で修士の学位をもつ教員は4人のみに止まる。

イギリス：Uni.of Stirling (商学)、Durham Uni. (化学)、Uni. of Edinburgh (物理)、Uni. of Birmingham (物理)、Uni. of Exeter (数学)、The Uni. of Nottingham (数学)、The Uni. of Sheffield (英語)、Uni. of East Anglia (英語)。

カナダ：The Uni. of Melbourne (経済学)、Uni. of Calgary (生物)、Saint Mary's Uni. Canada (英語)、Ryerson Uni. (英語)。

アメリカ：West Chester Uni. of Pennsylvania (芸術・音楽)

インド：Madurai Kamaraj Uni. (数学・図書館管理員・IBコーディネーター)

ニュージーランド：中国山東大学 (数学)

中国では、IBDPは高2と高3にあたるが、高1ではその基礎としてイギリスのIGCSEを取

り入れる学校が多く、イギリス出身の教員が多くなるのも自然なことであろう。

もう1校写真と履歴つき教員リストがホームページで公開されるF校の状況が次の通りである⁹⁾。F校の国際部外国教育プロジェクトはIBと並んでAPやA-レベルクラスも開講され、教員の併用も見られるが、教員の特徴を見るには差し支えがないと考えられる。掲載される60人の教員のうち、外国籍教員は34人である。イギリス13人、アメリカ9人、フィリピン2人以外に、以下の10カ国に1人ずつで、範囲がアフリカまでに及ぶ。その10カ国はカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、デンマーク、ネパール、スリランカ、インド、シンガポール、ケニア、ルワンダである。中国人教員は全体の約4割の26人になるが、中国語とともに、ほぼすべての科目を担当する点は、E校と大きく異なり注目される点である。具体的には中国語6人、英語1人、数学4人、物理2人、化学4人、生物2人、経済2人、情報3人、美術1人、音楽1人という構成である。学歴に関しては、26人のうち博士号を有する教員が10人で、残り16人は全員修士である。出身校を見ると、北京師範大学10人、北京大学7人、清華大学3人、中国人民大学2人、北京航空航天大学と中国科学院がそれぞれ1人、経済学の担当者2人の出身校はスタンフォード大学とニューヨーク大学である。ほかに北京航空航天大学とPurdue University及び清華大学とMITとの共同養成による博士がそれぞれ1人に、Georgia Institute of Technologyでの客員研究員1人と計3人の教員がアメリカでの研究経験を持つ。さらに長期の外国経験がなくても、博士号を有し国際的な雑誌に英文の論文が掲載される教員も複数見られる。

ここまで、教員に占める割合の多寡はあるものの、どの導入校にも外国籍教員とともに、欧米で留学や研究でその経験を有する中国人教員が不可欠な存在であると言える。

ここまでみたように、教育のグローバル化やグローバル的な人材の養成という政策のもと、中国の学校教育にIBが導入されたが、DP卒業生の大多数は欧米の大学を進学先に選んできた。その目標を実現するために、導入校は外国人教員と欧米での留学や研究経験者を教員として確保する上、欧米大学の入試スタッフによる説明会がかなりの頻度で開かれ、その応募に必要な進学指導の専門セクションも設置されるようになった。学校によってはそのポストに外国人のスタッフが配属される。

しかし、公立の学校として欧米の大学を主な進学先として注目するような教育のあり方が良いのか、そのような疑問は最近中国国内においても見られ、何らかの政策的な規制が必要であると言われるようになった。これから中国の公立IB導入校がどのような道をたどるのか、引き続き注目していく必要があるであろう。

【注】

- 1) 出所はIBOのホームページ「Find an IB World School」。
<http://www.ibo.org/en/programmes/find-an-ib-school/?SearchFields.Region=&SearchFields.Country=CN&SearchFields.Keywords=&SearchFields.Language=&SearchFields.BoardingFacilities=&SearchFields.SchoolGender=>（2015年2月28日）。
 その時点は計84校になっているが、リストに同じ校名が3回も重複されており、学校のホームページを調べた結果、同一の学校であると思われる。
- 2) 年代順で発表される関連論文は主に次の通りである。
 - ・ 呉亜東「挑戦一卷定終身のIB考試」『比較教育研究』1997年01期。
 - ・ 谷力・楊啓亮「國際文憑組織中学項目課程的啓示」『山東教育科研』2002年05期。
 - ・ 王艷「國際文憑組織」『中国考試』2006年01期。
 - ・ 顧彬彬「IB國際精英教育的典範」『南通大学学报』（教育科学版）2006年01期。
 - ・ 李永寧「從IB文憑課程的設計看國際教育的教育理念」『外国中小学教育』2006年07期。
 - ・ 顧彬彬「批判性思維与IB知識論課程」『南通大学学报』（教育科学版）2007年02期。
 - ・ 謝益民「國際文憑項目的学業評估特点及啓示」『外国中小学教育』2007年08期。
 - ・ 胡蘭「國際文憑項目与教師專業發展」『廈門廣播電視大学学报』2008年01期。
 - ・ 翁燕文「全球化背景下的國際高中課程評述－以IB課程、AP課程為例」『寧波教育学院学报』2008年04期。
 - ・ 胡卓敏・白益民「國際文憑項目及对沿海地区高中教育的啓示」『現代教育科学』2009年12期。
 - ・ 劉常慶「IB：國際教育的統一度量衡」『上海教育』2009年12期。
 - ・ 金京沢・張蕾「教育全球化：國際文憑項目的回顧与展望」『全球教育展望』2010年11期。
 - ・ 程黎燕「國際文憑第二言語課程評估簡介与啓示」『現代教学』2011年06期。
 - ・ 陳亞麗・侯振華「IBO國際文憑組織課程評述」『黑龍江教育学院学报』2011年11期。
 - ・ 惠中・車麗君「國際文憑組織PYP課程及其啓示」『外国中小学教育』2011年11期。
 - ・ 陶健敏「IB文憑項目中文課程大綱及相應教材編写策略探討」『華文教学与研究』2012年02期。
- 3) 黄丹青「中国における國際バカロレア導入の概況及びその背景について」『国立教育政策研究所紀要』第142集、2013年3月。
 黄丹青「中国の公立高校における國際教育プログラムの導入とその位置づけ」『目白大学総合科学研究』第10号、2014年3月。
- 4) 英国のGeneral Certificate of Education Advanced Levelをさす通称で、中等教育終了もしくは大学入学レベルにあることを示す学業修了認定である。
- 5) 米国のAdvanced Placementの略称。高校で履修できる大学レベルのプログラムであり、成績が基準に達せば、大学の単位に読み替えることができる。
- 6) Universities & Colleges Admissions Serviceの略で、大学入学に関する統一的な事務機関である。イギリスでは大学に入学するにあたり、志望する大学とその学部及び必要な成績をUCASに送付することになる。
- 7) <http://58.213.145.148/Press/ViewDetails.aspx?id=5618>（2015年5月11日）
- 8) 資料の出所は学校のホームページ<http://www.jdfz.sh.cn/gjb/index.htm>。
- 9) データの出所は学校のホームページ<http://icc.rdfz.cn>。

(平成27年11月4日受理)